
僕は光に包まれて、

宮原葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は光に包まれて、

【Nコード】

N8630V

【作者名】

宮原葉月

【あらすじ】

僕こと、風見 優希はある日の金曜日に謎の光に包まれてしまい『女の子』になってしまう。
一応、3話で終わりです。

短いですですが楽しんでもらえたら嬉しいです。

ブローグゝ悪夢と非日常の始まりゝ（前書き）

「長期休み企画」、始まります！

プロローグ 悪夢と非日常の始まり

僕は、風見 優希。中高一貫校の中学1年生。

今は、母さんの運転で自宅に帰っている途中だったりする。突然、辺りが光に覆われたのだ。

母さんはその光に驚いて車を急ブレーキをかけて止まらせるさ。そのせいで、重力が掛かった。

光が収まると僕は、体勢を整えて母さんに文句を言う。

「母さんっ。急ブレーキ掛けないでよ！ 重力が掛かったじゃん…っ。って、えっ!?」身体の異変に気付いたのだ。

声が高いし、それに胸の辺りが膨らんでいるっ!?

「えええええっ!」僕と母さんの驚き声が車内に響いた。

「母さん。とりあえず家に帰ろうよ」

「ええ。そっ、そうね」深呼吸をしてから車を発進させた。

家に着くと父さんが居た。——いつもは帰ってくるの遅いのに今日は早いなあ。と軽く現実逃避を試みた。

カバンを持って、いつも通りに家に入る。違うのは挨拶が小さいという事だけ。

「ただいま」と僕は小さな声で言って、急いで自分の部屋に入る。股が擦れて変な気持ちになるので、コッTONを股とパンツの緩衝材として使う。

色んな意味で疲れた僕は、力が抜けるように息をつくベッドに入ってた。——きっと、これは悪い夢なんだ。寝て起きれば、治っているはず。

「優希。入るぞ」とドア越しから父さんの声が聞こえて、キイトド

アが開く音がする。

僕は、その声を聞いた瞬間に布団に潜り込んだ。

父さんが無言で布団をバサツと取って僕をまじまじと見つめる。父さんの後ろには、母さんが立っていた。

「あ、ああ、あああ！」僕は父さんにこの姿を見られて錯乱状態さくらんじょうたいに陥っていた。

やっと僕が落ち着いたのはそれから、1時間後だった。

父さんと母さんが僕の隣に座って抱きしめる。

「姿は変わっても俺達の子だよ。優希」

「そうよ、優希は私達の娘よ」と言いながら、母さんは僕の頭を優しく撫でてくる。あれ、ニユアンス違くない？

「学校の事はママに任せてね」と言っ、母さんは何処かに出掛けてしまった。

「優希はとりあえず寝なさい。戸籍の事は俺がやっておいてやるから」と言っ、僕が部屋から出ていった。

部屋の中で一人になった僕は、糸が切れたように眠りに落ちていった。

1話 それは現実に起こったことでした

体内時計が朝だと告げている。挨拶が遅れましたね。僕は、み ゆうき風見優希。

昨日、悪夢のような出来事があったのだ。僕が女の子になってしまったという悪夢を。

それが夢だと信じて僕は、起きて身体を確かめる。——すぐに分かることがあった。これは現実だと。

「嘘だああああ！」と可愛らしい声が家中に木霊する。こだま

「僕は。僕は男だあああ！」

「おはよう、優希。学校は終わらせたから安心していいわよ」

「戸籍の方もどうにかなったからな」

「……早いね。でもどうやってしたの？」

と聞くと母さん達は気まずそうな顔をして誤魔化した。

「なんでもないのよ」

「ああ」

そして、母さん達は僕の部屋から逃げるように出ていった。

僕はあるところを見る。——そこには、なんと女物の服と下着があった。

「な…なんでええ！？ 母さんっ！」と僕は大きな声を出して母さんと呼ぶ。来たらすぐ言うつもりだ。これは何だ、と。

「どうしたの？」僕は「ソレ」を指さす。

「ああ。下着と服ね。着け方が分からないのね」と母さんは一人納得すると、僕に近づいて服を脱がした。

「これはね。こう、つけるのよ」とか「——ように穿くの」と母さんが言っているが僕には聞こえていなかった。

僕は両手をグーで握って身体をプルプルと震わせて、遂に爆発する。つひ
「僕は。——俺は男だあああ！」

母さんはハツとした顔になり、両手で顔を覆って、すんっ、すんっ
と泣いてしまった。

「ごめんなさいね。母さんが…すん…悪いのよ」

「母さん！？ ごめん、僕が悪かったから！ 泣かないで？ ねっ
？」

「そう？ 優希、かわいいっ！」と言って僕に抱きつく。——って、
嘘泣きだったんだ……。

「僕、出掛けてくるから」と言っ僕は母さんを離そうとするが、
力を入れているのか逃れることが出来ない。

「ダメよ。優希は、遥はるかと一緒に買いものについてこないといけま
せん！」風見 遥かざみ はるかそれが母さんの名前だ。

時々、母さんは一人称に自分の名前を使う事があるのだ。

「……分かったから。ついて行くから離して」

はあ、買い物かあ。まあ、いいか。欲しいモノもあるし。

——今日の予定は『買い物』に決まったのだった。

そう、これが優希にとって本当の悪夢の始まりだったのかもしれない。
い。

2話　ぼくは人形です

僕こと風見　優希かざみ ゆうきは、母さんに無理やり今日の予定を立てられて、買い物に行くことになった。

「優希ちゃん。行くわよ」と最後に音符が付きそうな感じだった。さて、今の僕の服装は、ジーパン、黒色の長袖にパーカーといった格好だ。――勿論、全て男物だ。もちろん

「今行く…」と母さんに言っ、財布と携帯電話を持って買い物に出発した。

車に乗って、隣の有名なショッピングセンターへ向かっていた。僕は携帯電話を弄っている。――友達とメール……なんて事は無く、ただ有名な某ゲームサイトを開いてゲームをしているだけだ。

メール受信画面に変わったので、届いたメールを見た。――幼なじみの優奈からだった。

「From：優奈

Sub：今日、暇？」

僕は、優奈からのメールなので本文を読む為にメールを開いた。

「隣のショッピングセンターの買い物、付き合っ、ほしいな忙しいなら、いいけどねっ！」

と随分、短いものだった。

僕は、すぐさま返信をする。

「To：優奈

Sub：Re：今日、暇？」

ごめん、今日忙しいから……。

僕の身体が色々大変だからね。」と打って送信した。

すぐに返事がきたがそれは無視した。――僕の現状を伝えないといけないような気がしたから。

「僕、これからどうなるんだろう」という問いの答えは、かえってこなかった。

エンジンが止まった。ショッピングセンターに着いたのだ。

僕は無言でドアを開けて車から出て——都会の空気だから、少し苦しいが。——深呼吸をする。

「母さん。僕”寝てる”から後よろしく」——これは僕の特技の内の思考殺しである。

——この判断が、間違っていた事に気づくのは今の僕には考えつかなかった。

3話　タイムリミット

あれ、エンジンの音がする。

僕は”目を開けた”。

「あ、母さん？ 服、何買ったの…ってえええ！」

何に驚いたかつて？ それは、自分が着ている服の事だ。

服のことはよく判らないので省略するが、露出が多いということだけは、はつきり言える。

「母さん！ この服は何っ！？」

「服だけど」

「露出の、この多さはなにさっ！」

そう、胸の半分ぐらいは出してるし……。しかも、このスカート短すぎて太ももが。

「いいじゃない……。その方が魅力的みりよくてきでしょ？」

たしかにそうだけど……。って危ない危ない、洗脳せんのうされるところだった。

「——じゃない」

「そうなのよ」

「むう……。これ以上、母さんに言っても無駄だよな。」

携帯電話を取り出してメールを確認する。——優奈からだった。

「From：優奈」

Sub：Re2：今日、暇？

身体？まあ、いいわ。それじゃあ、またね。」という内容が書いてあった。

「はあ……。2学期どうしよう」そうなのである。今日から夏休みなのだ。

いつもなら、夏休みを充実して楽しんでいるのに。

「その事なら大丈夫よ」

母さんの言葉を最後にして静寂せいじやくが流れる。——それは、家に着くま

で続いた。

家に着いて、すぐに自分の部屋に飛び込んだ。——この服装を見られたくないから。

男物の服に着替えなおして、今まで着ていた服を洗濯機に入れに行つてベッドに飛び込んだ。

その時、チャイムが鳴った。

「優希。いるんでしょう？ 入るわよ」

今まさに家に入ろうとしている優奈。——たしかに勝手に家に入ってもいい、と言ったけれども今はまずい。

どうする、と考えている内にタイムリミット——優奈が僕の部屋の扉を開ける——が近づいている。

既に、階段から足音がするので逃走は不可能。

エピソード―新たな悪夢の襲来の予感―

扉が徐々にだが開いてきている。僕にはすべてがスローモーションに見えた。

これって、やばい。

「あ」僕の口から間の抜けた音が漏れる。

色のついていていた世界が、モノクロになる。

「優希ゆうきだよな？ 大丈夫よ、悠はるかさんから聞いているから」

見られた。――ってちょっと待てよ。今何か聞いてはいけない単語を聞いたような。

「母さんから聞いたってホント？」

優奈ゆうなはええ、と肯定する。

僕はそうなんだ、と言ってがっくりとうなだれた。

「これで距離が縮まったね！」と優奈は嬉しそうに言って僕を抱きしめた。

僕は気づいていなかったのかもしれない。まさか優奈も……。そして巻き込まれることも。

エピソード〈新たな悪夢の襲来の予感〉（後書き）

これで終わりですが、どうでしたでしょうか。

お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8630v/>

僕は光に包まれて、

2011年8月20日14時03分発行